

放送日： 平成 20 年 10 月 19  
タイトル： 鼠径ヘルニアについて  
担当者： 医師 岡本 正吾

公立甲賀病院外科の岡本正吾と申します。

ヘルニアという言葉をご存知でしょうか？

体の弱い部分や隙間から臓器が他の部位に出てくる状態をヘルニアといいます。  
脊椎の椎間板ヘルニアや足の付け根近くの下腹部に起こる鼠径ヘルニアがよく知られていると思います。  
今日は鼠径ヘルニアについてお話しします。

お腹の中の臓器が鼠径部の筋肉の隙間の穴から出て来るわけですが、出てくる臓器としては小腸が多いため、俗に“脱腸”と呼ばれています。

症状としては、立った姿勢の時やお腹に力を入れた時に足の付け根が膨らみます。男性の場合、大きなものでは陰嚢まで達するものもあります。この膨らみは横に寝たり、手で押さえたりして、腸がお腹の中に戻ると消えます。

軽い痛みや不快感を伴ったり、便秘や腸閉塞を起こしたりすることもあります。

また時に“嵌頓”と呼ばれる緊急事態が起こることもあります。嵌頓とはお腹から出た腸が出口の穴で締め付けられ戻らなくなった状態で、腸の循環障害が起こるため、放っておくと半日以内に腸が腐って破れてしまいます。通常は強い痛みを訴え救急外来を受診されますが、高齢者で意識がはっきりしない方は手当てが遅れることがあり要注意です。

（年齢・性別）

鼠径ヘルニアが発症する年齢には2つのピークがあります。一つは小児期、もう一つは50歳以降の中老年期です。

小児の場合は生まれつきのものが多く、成人では鼠径部の組織が年をとるにつれて弱くなるのが原因となって起こります。

男性に多くみられ、全体の8割～9割が男性です。

（予防・治療）

次に鼠径ヘルニアの予防法と治療法についてお話しします。

現在のところ鼠径ヘルニアの発症を予防する良い方法は残念ながらありません。

治療法は手術が唯一の根治的な方法です。

小児では自然に治癒することがあり3歳頃まで様子を見ることがあります。しかしながら、一方では、嵌頓は1歳未満の幼児期に起こることが多いため、生後3ヶ月を過ぎれば早期の手術を勧めるという意見もあります。

大人の鼠径ヘルニアの場合は自然に治ることはなく手術が必要です。

痛みのない方でも放っておくと、先程お話ししましたように、腸が出たまま戻らなくなり血流障害のため腐ってくる“嵌頓”という状態になることがあります。

腸が腐ってしまっている場合は腸を切り取る手術が必要になります。

嵌頓を生じた状態での緊急手術は術後合併症の頻度が増し、高齢者においては特に危険であるため、原則的にはヘルニアが見付かり次第、早めに手術するべきと考えられています。

続いて大人の場合の手術法についてお話しします。

手術法には従来からの自己組織により修復を行う方法と近年普及してきましたメッシュを用いる修復法とがあります。

従来の方法では周囲の筋肉を縫い合わせてヘルニアの出口の穴を塞いでいましたが、術後の痛みが強く、

また、筋肉組織が裂けたり弱くなったりしてヘルニアが再発することも10%程度ありました。人工のメッシュシートを用いて穴を塞ぐ方法は20年ほど前に開発され、徐々に普及してきています。鼠径部全体にしっかりと補強を行うことが出来、再発の少ない手術方法です。この方法で行いますと再発率は1%以下です。入院期間も1週間以内と少なくすみ、早く仕事やスポーツに復帰することが出来ます。また再発の問題が解決されてきた現在、術後の慢性の痛みが問題視されてきています。甲賀病院では術中の神経の確認や温存など、慢性の痛みの予防に注意して手術を行っています。

さらに、以前にヘルニア手術を受け再発された患者さんもまた手術の対象となります。甲賀病院では再発ヘルニアに対しても様々なメッシュを用いて手術を行っております。

最後に大人の鼠径ヘルニア手術の麻酔法についてお話しします。

鼠径ヘルニアの麻酔法には全身麻酔・下半身麻酔・局所麻酔があります。下半身麻酔で行っている病院が多いのですが、甲賀病院では局所麻酔でも多くの手術を行っています。局所麻酔で手術を行うには多少のコツと慣れが必要ですが、血圧の低下や色々な合併症の危険が少なく、ご高齢の患者さんや他の合併疾患をお持ちの患者さんにも安全に手術を行うことが出来ます。

本日の話のまとめとして、鼠径ヘルニアをお持ちあるいはその疑いのある方は外科を受診して診察を受けてください。手術が必要と判断された場合には、緊急事態が起こり大事になる前に手術をお受けになることをお勧めします。